

夏休みの宿題・自由研究の ルーツを探る

「夏休み」……高揚感と解放感に満ちた魅力あるイメージに、ほんの少し影を落とすのが「夏休みの宿題」。その中でも「自由研究」は最大の難敵と感じていた方も多いのではないだろうか。

世界的に見ると、夏休みに宿題を出している国はアジアの数か国だけの少数派。かつては日本同様、宿題大国といわれた中国も、2021年7月に施行された双减政策により、宿題の量が大幅に制限された。

今回は夏休みの宿題、そして自由研究について、日本の教育史を振り返り、その誕生、経緯などをみていきたい。

一、夏休みと宿題

◆夏休みの制度化

1872年（明治5年）の学制発布によりスタートした近代的学校制度。スタート時にはなかった夏季休暇の制度だが、5年後の1877年頃には普及しつつあったようだ。そして、明治14年（1881年）、文部省が発表した小学校教則綱領（抄）（明治十四年五月四日文部省達第十二号）には、第七条に、

小学校ニ於テハ日曜日、夏季冬季休業日及大祭日、祝日等ヲ除クノ外授業スヘキモノトスとあり、この時点で夏季・冬季の休業が制度として明示されたこととなる。

◆夏休みの宿題の登場

さて、1881年、夏休みが制度として認められたわけだが、宿題がセットとしてスタートしたわけではなさそうだ。『明治期における日本の尋常小学校の「夏休帖」等に関する研究』（現代教育学部紀要 1339-47, 2021-03）では、夏休みの宿題について、次のような研究結果をまとめている。

- (1) 明治時代における小学校の夏休みの宿題は、1910年ごろに出現した。
- (2) 夏休みの宿題の内容は、国定教科書の内容を反映したものであった。
- (3) 夏休みの宿題の内容は、児童の夏休み中の活動的な学びを促すものがあった。

10年頃、日本の小学校の夏休みの宿題は、復習による学力定着を目指したものであるという点、さらに時代が進むと「夏休帖」なる冊子も登場することから、現代の「夏休みの友」「夏休み復習ドリル」はこのときにす

で誕生していたということだろう。

◆夏休みの宿題登場の背景

当初課されなかった宿題が1910年頃から登場した理由を、制度の変遷から考えてみよう。

まず国定教科書の存在。1903年から使われるようになった国定教科書。学制発布では、学校で利用する教科書については規定がなかったのが、国定教科書の登場で全国統一されることになる。そして、時を同じくして行われた「等級制」から「学級制」への移行。「等級制」は、試験によって進級が決まる。ある一定レベルに達したとみなされなければ、次の等級に進めない。

当時、小学校は4年間の修業期間で、半年を標準修業期間とし、4年間で8級で分け、試験に合格すると次の等級に進めることになっていた。このため、試験に合格できず、最初級の8級や7級で4年間の修業期間を終了する児童もかなりの数いたことだ。

この等級制という仕組みから、試験なしで自動進級する「学級制」へ移行していくのが1900年前後。

最後に、就学率。学制発布時、30〜40%程度だった就学率が、1910年には100%近い就学率に。

改めて整理すると、夏休みの宿題登場の背景は、次の3点になる。

- (1) 学ぶ内容が全国で統一されたこと。
- (2) 進級試験の廃止。

(3) 就学率の大幅なアップ。

これらを宿題との関連でみてみよう。進級試験の廃止で学ぶモチベーションが下がり、学力が低下する一方、増加した児童全員の学習内容の定着を図る手段が必要になった。加えて、学習内容も統一されていたため、今までのように進度を考慮することなく、課題をつくりやすくなった……ということが夏休みの宿題の背景にあると考えられるのではないだろうか。

二・自由研究

◆教科「理科」の登場

少し視点を変え、自由研究とかわかりが深いと思われる「理科」という教科について見てみよう。

「理科」が登場するのは、1886年（明治19年）の文部省令第八条。内容や取り扱いの程度が示された。

その5年後の1891年（明治24年）に示された小学校教則大綱には、

理科ハ通常ノ天然物及現象ノ観察ヲ精密ニシ其相互及人生ニ対スル関係ノ大要ヲ理会セシメ兼テ天然物ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

最初八主トシテ学校所在ノ地方ニ於ケル植物動物鉱物及自然ノ対象ニ就キテ児童ノ目撃シ得ル事実ヲ授ケ就中重要ナル植物動物ノ形状構造及生活発育ノ状態ヲ観察セシメテ其大要ヲ理会セシメ又学校ノ修業年限ニ応シ更ニ

植物動物ノ相互及人生ニ対スル関係、通常ノ物理上化学上ノ現象、通常児童ノ目撃シ得ル器械ノ構造使用等ヲ理会セシメ兼テ人身ノ生理及衛生ノ大要ヲ授クヘシ

とある。前段では、「現象の観察」を起点として、相互の関係ばかりでなく、人生の関係についても理解すること。そして、自然を愛する心を養うこと、など、理科に向き合う方法や姿勢を述べ、後段では、その方法や手段など、より具体的な内容に踏み込んでいる。

実際の観察を重視し、教科書の記述との差異が出てしまうことを配慮し、教科書の使用を禁止していた時期もあるようだ。教科書よりも実体験を重んじる、その思想は科学を学ぶ本質として自由研究に通じるものだ。

◆自由研究は「教科」として登場

さて、「自由研究」だが、1947年（昭和22年）の文部省『学習指導要領・一般編』において、教科「自由研究」として登場する。文部省から示された初の「学習指導要領」は、子どもたちの現状に応じたカリキュラムを作成するための「教師自身が自ら研究していく手引き」というスタンスでつくられたもので、「試案」という言葉が付されている。

そもそも「教科」の学習については、いずれも児童の自発的な活動を誘って、これによって学習がすすめられるようにして行くことを求めている

としており、「自由研究」という教科の時間の使い方については、

児童がひとりですべての活動によって学んで行くことが、なんのさしさわりがなければか、その方が学習の進められるのにも適当だということもあるが、時としては、活動の誘導、すなわち、指導が必要な場合もある。このような場合に、何かの時間において、児童の活動をのびし、学習を深く進めることが望ましいのである。ここに、自由研究の時間のおかれる理由がある

と説明されている。そして、

児童青年の個性を、その赴くところに従って、のびして行こうというのであるから、そこには、さまざまな方向が考えられる。ある児童は、工作に、ある児童は理科の実験に、ある児童は書道に、ある児童は絵画にというふうに、きわめて多様な活動がこの時間に営まれるようになろう

と、想定される例も書かれる。自由研究は、小学校4年生以上と中学生に教科として採用された。他の教科と合わせ、時間数を図1に示す。なお、教科・自由研究は、各教科学習を伸長・拡張するほか、「クラブ活動」や「委員会活動」にも利用できることになっている。

熱い思いでつくられた日本初の学習指導要領の中で登場した「自由研究」だが、1951年（昭和26年）7月1日の学習指導要領改訂のときに、自由研究の名称は「教科外活動の時間」と改められ、教科からは消えてしまう。

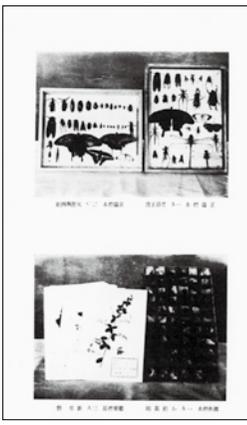
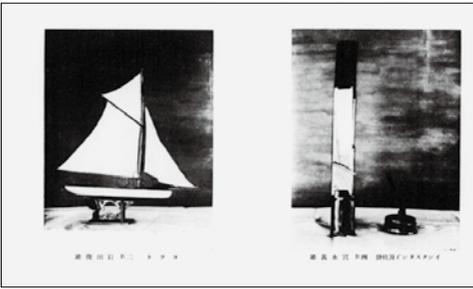
◆自由研究は宿題として復活

自由研究は教科としてはなくなりましたが、その後、子どもたちの自発的な活動による学習、個性を伸ばしていく活動等の取組と形を変えて、宿題として復活する。そして、現在に至るわけだが、夏休みの宿題として自由研究を出していたことがわかる資料が残っている。

1935年に出された『夏季休暇中に於ける生徒の自由研究一斑』(石川県立金沢第三中学校)に掲載された作品は、私たちがよく知る夏休みの宿題・自由研究そのものである。生徒に教科書とノートより解放せられた彼等自らの意欲による自由な研究をささる機会を與へて、積極的な研究心を養成しなければならぬ必要を痛感する

図1 各教科の年間時間数(1947年)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	175	210	210	245	210-245	210-280
社会	140	140	175	175	175-210	175-210
算数	105	140	140	140-175	140-175	140-175
理科	70	70	70	105	105-140	105-140
音楽	70	70	70	70-105	70-105	70-105
図画工作	105	105	105	70-105	70	70
家庭					105	105
体育	105	105	105	105	105	105
自由研究				70-140	70-140	70-140
総時間	770	840	875	980-1050	1050-1190	1050-1190



『夏季休暇中に於ける生徒の自由研究一斑』(石川県立金沢第三中学校)より

自由研究の目的は、生徒の自発的な研究心を養成することにある。そのためには、教科書とノートから解放され、自らの興味・関心に基づいて、自由な研究を許さなければならない。以下に、自由研究の具体的な方法と、その意義について述べる。

自由研究の方法は、大きく分けて二つある。一つは、観察・実験による研究であり、もう一つは、資料調査による研究である。観察・実験による研究は、自然現象の仕組みを明らかにするために有効である。資料調査による研究は、過去の研究成果や社会問題について学ぶことができる。

自由研究の意義は、単に知識を得ることだけでなく、問題解決能力や創造性を養うことにある。また、自己学習の習慣を身につけることも重要なポイントである。

という緒言から始まるこの本に掲載された自由研究のテーマは200を超えている。さらに、優秀作品は、教科ごとに整理され、テーマ・内容と一部の作品を誌面で紹介している。

例えば、数学科では、「πの歴史的研究」「関数のグラフに関する系統的研究」、物理科では、「写真の研究」「点滅器」「盗難報知器」「ラヂオ受信機(一球)」など。化学科の「清酒の醸造」「醤油、味噌醸造法」、体操科の「グラフ作成(脈拍、呼吸に関する)」など、興味

味深いテーマもある。また、博物科の「昆虫採集」「植物採集」といった標本、工作作業科の「帆船」といった工作は今と変わらないものも。優秀作品として掲載されたもの一部を示す。

今回、夏休みと夏休みの宿題、そして自由研究のルーツとその経緯を見てみたが、背景と込められた思い、児童・生徒ファーストの考え方など、現代でも大いに生かせるのではないだろうか。

〔参考文献〕
 ・明治期における等級制から学級制への移行をめぐる論調―教育雑誌記事の分析を中心に―
 ・短期大学部紀要第36号(2015) 村村美佳
 ・わが国における「学級制」の成立と学級の実態の変化に関する研究 教育社会学研究第33集(1983) 滝名陽子
 ・明治期における夏期休暇をめぐる言説の変遷 京都大学大学院教育学部研究紀要 49号(2003) 渡辺貴裕
 ・学校の戦後史 岩波新書 木村元